



神眼



川崎ゆきお

神社の鳥居前に川があり、石橋がある。その欄干に老人が腰掛け、煙草を吸っている。

そこに行者風の男が近付き、声をかけた。

「その神社には神はいない」

老人は下を向いたまま聞いている。猫背なのでそのように見えるのだろう。

「ここの本殿に居座っているのは野良犬の妖怪だ。この周辺に昔いた老犬らしい。もう何十年も前のことだろう」

「そうですねえ、最近野良犬など見かけませんからなあ」

「だから、昔に入り込んだのだろう」

「そのまま居座っておるのですかな」

「だから、この神社に参拝しても、妖怪犬を拝んでいるだけのこと」

「犬の神様なら犬神様じゃな」

「それとは違う」

「筋ものではないと。で、どんな犬ですかな」

「やんちゃな赤犬だ。狂犬ではないがな。年取った賢い犬だ。ただ悪戯が好きな犬と見た」

「そんなものが、見えるのですかな」

「わしには神眼がある」

「心眼？」

「神の眼と書く」

「それはそれは、奇異な」

「そこに小さな祠があるだろう」

狭い通りが見える。その先に小さな祠がある。中に漬け物石のような石地蔵が祭られている。

「あそこにはゴキブリがおる。地蔵菩薩などいない」

「よく分かりますなあ」

「これが、神眼の力」

「では、神や仏は何処におられるのですかな」

「そのようなものはいない」

「ほう、でもあなた神眼をお持ちだ。それは神様のオメメのことでしょ」

老人は塞がっていた瞼を少しだけ開け、行者の目を見る。

行者は自分の目に針が刺さったように感じた。

「神がないのに、神眼ですかな」老人は目を閉じ、ぼそぼそ声で言う。

「神とは」行者は聖なる言葉を発するときによくあるような、厳かな作り声を出した。

「はい、神とは？」

「心の中におわす」

それを聞いた老人は立ち上がり、立ち去ろうとした。

「神は心の中におわす」

行者は老人の背中に声をかけるが、反応がない。

「これが、神眼の御札」

行者は懐から目玉の画かれた御札を出し、老人の前に出る。

「おひとつ、いかが」

「安心しました」

「なんと」

「御札売りでしたか」

「いやいや、この御札を持てば、何があなたに幸いをもたらすかが見えるようになります」

「はいはい」

老人はその値段を聞いたが、結構安い。それにも安心したようだ。

「あなたは、この神社の方か」と行者が問う。

「あなたと似たようなものじゃ。それよりも、人生は短い。あらぬ事をしておるうちに過ぎ去りますぞ。その心眼で、あなたも幸せを見付けなされ」

「何者ですか、名を聞きたい」

老人は素性を明かさず立ち去った。

妖怪を研究しているこの老人、妖怪博士と呼ばれているが、名乗っても誰も知らないだろう。

了